

受験番号

2026年度入試

神戸国際中学校 C選考

## 国語

(2026年1月20日実施、国語と算数あわせて50分、50点満点)

(注意)

- 1 解答用紙と問題冊子の両方に必ず受験番号を記入してください。
- 2 全ての問題に解答してください。
- 3 解答は全て解答用紙に記入してください。記入方法を誤ると得点にはならないので、十分に注意してください。
- 4 試験終了後、解答用紙と問題冊子の両方を提出してください。

① 次の本文を読んで、後の問いに答えなさい。解答に字数の指定のある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。(本文に一部表記を改めたところがあります。)

長袖の冬服を着ると、まだ汗ばむような気がする。それでも、季節は、衣替えの秋になっていた。

深雪は、深く息をすいこんでみた。十月の朝の空気が気持ちよく胸の奥にしみる。

「おはよう」

後ろから声をかけられた。藤平菜里が立っていた。肩の辺りまで伸びた髪を、今日は二つにわけて赤いゴムでとめている。

「おはよう、昨日はごくろうさま」

深雪は、菜里の髪を軽くひっぱった。昨日はおそくまでかかって、

①文化祭の準備をしていたのだ。夏休みに深雪、菜里、駒木千博、荻野真吾の四人でやった社会の宿題、「わたしたちの街、その歴史と生活」が、なかなかの出来だったのだ。年表を作って、各時代ごとにイラストを入れた。十二単を着た平安朝の女人や※袴姿の武士、二十以上のイラストは菜里一人で担当し、美しく仕上げた。その年表を社会科担当で担任の生田先生が気に入り、文化祭の展示会場にはり出すことに決めた。そうなれば、もう少し見やすいようにと、字を大きくしたり、イラストの色を塗り直したり、四人は、昨日おそくまでがんばった。生田先生が差し入れてくれたパンを※頬ばりながら真吾がしみじみした口調で「なんか、充実した時間だなあ」と言った。

「おまえは、何か食ってたらいつでも充実してんだろ」

と、千博がからかう。パンをくわえた真吾の顔がおかしくて、深雪も菜里も、声を出して笑ってしまった。この数カ月で、四人はずい分、親しくなったと思う。思いのほか、菜里がよく笑うことも、千博が冗談を言うことも、※軽薄で無責任だと思っていた真吾に汚れ仕事をいとわない※真摯さがあるとも知った。驚きだった。楽しくもあった。その総仕上げとして、昨日、四人は年表を作り上げた。文化祭が終わったら四等分して、記念に持っておこうと、真吾が提案した。あんがい真吾も※ロマンチストなのかもしれない。

「藤平、江戸時代のとこに、おれに似たかっこいい忍者、描いてくれよ。おれ、その時代をもらおうから」

「荻野くんの忍者、えー、描けるかな」

「菜里、アンパンくわえてる絵にしるよ」

「あつ千博くんに賛成。絶対そっくりになるよ、菜里ちゃん」

昨日かわした会話を思い出す。

「深雪、何がおかしいの」

「え？ あはっ、やだ、思い出し笑いしてた……あれ？」

教室から人影が出てきた。女の子らしい。非常階段の方にばたばたと走り去っていった。昨日完成した年表を、壁にはってみるつもりで、今朝はいつもより三十分以上早く登校していた。学校全体が、まだ、活動時間前の静かさの中にあつた。こんな時間に、誰が教室に……(A)胸の奥が痛んだ。いやな予感がした。予感はいやな時だけ当たるのだ。(I)が速まる。深雪は、ほとんど駆け込むようにして、教室に入った。

「あつ……」

息がつまった。

「ひどい……」

茉莉の声がかすれて、ふるえる。昨日、茉莉の机の中に入れておいた年表が引きずり出され、びりびりに破かれている。床に散った紙くずは、朝の光の中で白くういて見えた。深雪を押しつけ、茉莉が前にでる。しやがみこむと、無言で拾い始めた。泣くまいと唇をかみしめている。深雪は、目をそらし、非常階段まで走った。驚きより悲しみより、今、身体の中に怒りが渦巻いている。青くペンキを塗られた非常階段には、だれの姿もない。ゆっくり降りてみる。四段目に小さな髪どめ用のピンが落ちていた。先にリンゴの飾りがある。非常階段の手すりをつかみ、深雪は深呼吸をくりかえした。朝の気がひんやりとしみた。さっきまでの、心地よさはどこにもなかった。

生田先生は、一時間目をつぶしてホームルームにあてた。

「犯人探しではなく、なぜ、②こんなことになったのか、思い当たることのある者は、言ってくれないか」

先生の言葉が終わらないうちに真吾が立ち上がり、こぶしで机をたたいた。

「ぶざけんなよ。この中に犯人がいるなら、おれ、絶対に許さないからな」

普段、明るく※ひょうきんな真吾の本気に怒る顔は、ひるむほど迫力があつた。千博が、しずかに深いため息をもらす。茉莉は、うつむいていた。深雪は、後ろをふりかえり、何もはっていない壁を見た。

あんなに楽しかったのになぜ……

放課後、深雪は③だまって教室を出た。図書室に行く。一番奥の棚と

棚との間の通路に、栗坂美希が立っていた。

「なつなによ綾部さん……こんなところに呼び出して、あたし、塾が」

「どうしてあんなことしたの？」

自分でもきつい声だなどと思った。美希のくちびるは、はつきりとわかるほど、震えていた。美希は、今朝拾ったピンをさしだした。

「これ、栗坂さん昨日つけてたよね。今朝逃げる時落としたでしょ」

「そんな……」

「あたし、見たのよ。栗坂さんが今朝早く、教室から出て行くところ」嘘だった。今朝の人影は遠すぎて女子であること以外、何もわからなかったのだ。でも、美希は手で顔を覆いしやがみこんで泣きだした。

泣かないでよ、泣いてごまかしたりしないでよ、茉莉ちゃんは泣かなかったよ。唇をかみしめて、泣かなかったよ。泣いて終わりになるようなことじゃないもの。それで許されることじゃないもの。

心の中で叫ぶ。④こぶしを握り締めると手のひらが汗ばんでいた。ふいに美希が顔をあげる。立ち上がり一つ、ゆっくりと息をはいた。かすれた小さな声で、話し始めた。

「あたし、真吾くんのこと好きだった……小学校の頃からずっと……告白しようと思ってた……でも、断られるのが怖くてできなくて……なのに、綾部さんたち、すごく楽しそうに話して……真吾くん、綾部さんのこと好きみたいで……」

「ばかなこと言わないでよ」

「ばかじゃない。あたしわかるもの。真吾くん綾部さんばかり見てるじゃない。あたし、悔しくて……」

「それで、あんなことしたわけ」

美希が、うなづく。

「あたし……最初からあんなことするつもりじゃなかった……あたし、合唱部だから、文化祭のための朝練があつて、早く来たの……教室に入ったら誰もいなくて、藤平さんの机からあの年表がはみ出して……そしたら、綾部さんと真吾くんが笑いながら話したりしているの思い出して……頭の中が（B）熱くなつて、気がついたら……」

美希はあごをあげて深雪を真正面から見た。

「ひどいことしたつて思っている。今日一日、藤平さんの顔、見られなかった。自分で自分が厭いやだったから」

「じゃ、今、あやまつて」

茉里の声が出た。ふりむくと深雪が背にしていた棚の陰から茉里が現れた。茉里は美希に近づいた。

「今、ちゃんとあやまつてよ」

美希の肩が震え始めた。

「ごめんなさい、藤平さん、ごめん」

頭を下げそれだけ言うと、美希は図書室を走り出て行った。

「茉里ちゃん、なんで、ここが」

「わかるよ。深雪のようすが変だったもの。なにか隠してるみたいで、さっさと教室出て行くし、あと、つけたの。みんないっしょ。ねっ」

茉里の後ろから千博と真吾がのぞいた。

「おれたちマジ忍者みたいだな」

真吾がべろりと（II）を出す。千博は真面目な顔で言った。

「綾部、おれたちのことなんだからさ、相談ぐらいしてくれよな」

茉里がうなずいた。

「そうだよ。だまつてないで、ちゃんと相談してよ、深雪」

茉里に責められたのは、初めてだ。深雪は、はいと返事をした。

「で、どうすんの。栗坂のこと、先生に言っちゃうわけ？」

真吾がふつと息をはいた。

「言つてもしょうがないんじゃない。年表元にもどるわけじゃないし……悔しいけど……言いつけたりしたら、なんかすごくいやな気持ちになるし……そしたら、せつかくの楽しかったことまで無くなるみたいで」

茉里が、自分の足先を見ながら、もごもごしゃべる。

「なつ、また作んない」

真吾が、いつもの陽気な口調で言った。

「宿題とか文化祭のためじゃなくて、おれたちのために、すげえの作ろうぜ。年表作成第二弾」

「それを四等分して持つとくんだな。もち、真吾の忍者姿イラストつきで」

千博がそう言つて、（C）笑う。うつむいていた茉里が、顔をあげた。

「綾部は？ もちOKだよな。よっしゃ、またがんばろうぜ」

真吾がガツポーズをきめた。深雪は目を細め、三人の顔を見た。破られた年表を見つけたとき、終わつたと思つた。楽しかった思い出もびりびりに破られてしまった、そんな気がした。怒りがあった。今まで美希を問い詰めて、怒りをぶつけることだけを考えていたような気がする。茉里のように、美希を許すことも、真吾のようにもう一度、作り直すことも、考えもしなかった。⑤ かっこいいな。ふいにそう感じた。

「みんな、かっこいい」

ふっとつぶやいていた。真吾がえつと聞き返した。

「なに？綾部、今、真吾くんかっこいいとか言わなかった？」

「まさか。言うわけないでしょ」

深雪は、笑いながらそう言つて、真吾から目をそらした。

( あさのあつこ 『13歳のシーズン』 )

※ 袴姿：武士の礼服で、肩衣かたぎぬと袴はかまのこと。

※ 頬ばる：口の中にいっぱい食べ物を入れること。

※ 軽薄：言動に慎重さや誠実さのない様子。

※ 真摯：まじめにやる様子。

※ ロマンチスト：ロマンチックな考えを持つこと。夢見がちなこと。

問1 (A) (B) (C) に入る言葉として適当なものを次のア～オからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア ちくつと イ じろりと ウ カツと

エ くすりと オ キツと

問2 (I) (II) には、体の一部を表す語が入ります。それぞれ漢字一字で答えなさい。

問3 | ①「文化祭の準備」とありますが、深雪たちは文化祭のために、年表にどのようなことをしたのですか。「したこと。」に続くように、

本文から三十五字で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問4 | ②「こんなこと」とはどのようなことですか。二十五字以内で答えなさい。

問5 | ③「だまって教室を出た」とありますが、深雪はなぜだまって教室を出たのですか。その理由を十五字程度で答えなさい。

問6 | ④「こぶしを握り締めると手のひらが汗ばんでいた」とありますが、この時の深雪の気持ちとして適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 必死に理由を述べる美希に対して、疑問に思う気持ちがわき上がっている。

イ 涙ながらに話す美希に対して、同情したくなる気持ちがわき上がっている。

ウ 黙りこんで泣く美希に対して、納得できない気持ちがわき上がっている。

エ 嘘をついて呼び出した美希に対して、申し訳ない気持ちがわき上がっている。

問7 | ⑤「かっこいいな。ふいにそう感じた」とありますが、どうして深雪はこのように思ったのですか。深雪の行動と、茉里・真吾の行動を比べて、その理由を五十字以内で答えなさい。

問8 本文の内容として適当でないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ⑤ ア これ  
イ それ  
ウ あの  
エ どれ

ア 年表を作り上げた四人は、文化祭の発表が終わった後、年表を四等分してそれぞれ持っておこうと約束をした。

イ 深雪は、教室から出て行く人影が髪どめを落としていったことに気づいて、その人影を急いで追いかけて行った。

ウ 美希が、年表を破いてしまったのは、年表を見たときに、深雪と真吾が仲良くしていたことを思い出したからであった。

エ 年表を破った犯人について、真吾は生田先生に言うかどうか茉莉に聞いたが、茉莉は言わないことを伝えた。

㉓ 次の①～⑤のア～エの中には、一つだけ他の三つと種類の違う言葉が入っています。違うものをそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

① ア すずしい イ やさしい ウ せまい エ のどかだ

② ア あらゆる イ しかし ウ そして エ だから

③ ア 伝統 イ 少し ウ 祖母 エ 彼女

④ ア 住む イ 生きる ウ 若い エ 勝つ